様式 C-19

# 科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年３月３１日現在

研究種目：　基盤研究（C）
研究期間：　2006～2008
課題番号：　１８５２０２２２
研究課題名（和文）　アメリカ南西部の境域をめぐるチカーノとアメリカ先住民の文学

研究課題名（英文）
Chicana/o and Native American Literature in the U.S. Southwest Borderlands

研究代表者
喜納　育江（KINA IKUE）
国立大学法人 琉球大学・法文学部・准教授
研究者番号：２０２８４９４５

研究成果の概要：
本研究では、アメリカ南西部における米墨国境地帯の文化的「境域」におけるチカーノとアメリカ先住民の文学について、これらの文学が、国境線で分断された故郷や大地とのつながりを求める先住民としての想像力を共有していることを明らかにした。特に、国内の研究成果が皆無に等しかったチカーナ文学の文学的想像力に注目し、チカーナと先住民文化の関係を明らかにする複数の研究論文を発表した。

交付額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| 2006 年度 | 1,400,000 | 0 | 1,400,000 |
| 2007 年度 | 1,200,000 | 360,000 | 1,560,000 |
| 2008 年度 | 900,000 | 270,000 | 1,170,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総　計 | 3,500,000 | 630,000 | 4,130,000 |

研究分野：　人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード:アメリカ先住民文学、チカーノ文学、チカーナ、先住民女性、境域(borderlands)、グローリア・アンサルドゥーア、シェリー・モラガ

## １．研究開始当初の背景

本研究は、過去に科学研究費補助金・若手研究の交付を受けて進めてきた、「多文化主義」および「ポストコロニアル文化研究」の視点によるアメリカ先住民文学研究を発展させる形で、近年興隆の著しいチカーノ(ナ)の文学に着目し、とりわけアメリカ南西部にある米墨国境地帯に生きるチカーノ（ナ）の文学が、アメリカ先住民文学と連関してその地域の文化的境域性の形成にどのように寄与しているか、また、そのような境域文化(border culture)のありようが、アメリカ文学全体にどのような展望を与えるかを究明の動機として始められた。

アメリカにおいては 1970 年代から本格的な小説が生み出され、1990 年代の多文化主義の定着によって注目されるようになったチカーノ文学だが、2000 年の国勢調査で、ヒスパニックが黒人に代わってアメリカ最大のマイノリティ集団となったことが明らかになると、21 世紀におけるアメリカ社会のこうした歴史的な変容を反映して、そのヒスパニックの中でも最大数を占めるメキシコ系移

民すなわちチカーノに対するアメリカの社会的・文化的関心はより一層の高まりを見せることになった。

2006 年(平成 18 年)度の本研究開始当初の段階の日本国内では、すでに今福龍太による文化人類学的アプローチによるチカーノ文化論、越川芳明や斉藤修三の文学的アプローチによるチカーノ詩、チカーノ文化研究のような重要な先行研究があったほか、2005 年に『すばる』などの文芸雑誌においてチカーノの作家による短編小説の翻訳テクストが紹介されるなど、チカーノ文学への一般的関心が高まる傾向が見受けられたものの、アメリカ文学の中の研究分野としてはまだ黎明期の様相を呈していたと言える。アメリカ文学研究の文脈で出版された初期の研究書としては、大森義彦の『アメリカ南西部メキシコ系の文学―作品と論評』(2005) が挙げられるが、その内容は、主に作者と作品の概説であり、アメリカ南西部やチカーナ（ノ）文学のもつ地政治性にまで踏み込んだ研究論文や、チカーノの女性であるチカーナの文学についてフェミニスト批評の視点から研究された成果を示す論文は、日本においては皆無に等しかったと言える。

日本のこうした状況と比べ、アメリカでは、チカーノ文学に対する認識はもはや学術的には常識の範囲内であり、また、チカーナの文学とチカーナ・フェミニズムの思想についても、チカーノ文学というジャンルのありようを再定義するほど有力な存在と認識されていた。本研究を開始する前の 2005 年に、筆者はチカーナの重要な書き手であり思想家であるグローリア・アンサルドゥーアについて『英語青年』に短い評論を発表していたこともあり、チカーノ文学においては、特にチカーナの書き手たちのテクストが重要となるという認識を以て、本研究課題に臨んだ。

## ２．研究の目的

本研究では、チカーノとは誰か、チカーノ文学とはどのような文学かという最も基礎的な問いを念頭に置いたうえで、かつてのメキシコ領で、1846 年以降は米国に領有されることとなったアメリカ南西部の米墨国境地帯における言語的、人種的、歴史的混淆文化を「境域文化」と定義し、米墨国境という環境で育まれる文学の具体的な特徴や、国境の両側に存在するアメリカとメキシコの「先住民文化」が境域文化の形成に果たす役割について究明することを目的とした。

アメリカ合衆国が多民族社会であることは言うまでもないが、「多民族」の諸相が文学テクストに具体的にどのように表現されているかを探るうえでは、英語とスペイン語、そしてそれらから派生するチカーノ独特の言語を使用し、先住民と白人の混血の身体に伴うアイデンティティを表現しようとするチカーノ文学を研究することが極めて重要となる。チカーノ文学には、人種、文化、言語といったさまざまな概念あるいは体系の挟間に生じる「境域」で起こっている葛藤が表現されているからである。さらに、アンサルドゥーアやシェリー・モラガをはじめとするチカーナの文学においては、男性と女性のジェンダー、そして異性愛者と同性愛者のセクシュアリティの「境域」における葛藤も表現されている。

本研究ではこうした「境域」をめぐるさまざまな文化的葛藤を究明することによって、そのような境域文化から生まれる文学が、アメリカ文学の全体像をどのように再編・再定義していくのかについて思考を巡らせることも目的とした。

## ３．研究の方法

まずはこれまでに未読だった作品も含め、チカーノ文学のテクストを精読・解釈し、その解釈の妥当性、説得力を高めるために資料・情報収集をするというオーソドックスな文学の研究方法を基本とし、文化研究では軽んじられがちなテクストの精読を意識的に重視した。そのうえで、チカーナ（ノ）の文学テクストをさらに深く理解する目的で、チカーノの歴史、言語、精神文化の背景、および政治的イデオロギーなどの文脈についての知識の向上に努めた。

国内での先行研究が極めて希少であるため、主に米国ニューメキシコ州およびカリフォルニア州の大学図書館に足を運んで資料収集をした。特に、チカーノ文学の成り立ちを伺わせる 1960～70 年代の一次資料を収集したり、米国の大学のチカーノ研究者、境域文化の識者、および作家、詩人に直接会い、インタビューをしたりすることにより、未出版・未公開の情報も獲得し、国内外に例を見ない独自の調査結果を導くことができるように心がけた。

## ４．研究成果

本研究では、先述したようなチカーナ（ノ）文学の基礎研究を進めながら、アメリカ南西部の歴史や風土といった「場所」に由来する背景が、アメリカ先住民やチカーノの文学のありようにどのように影響していたかを探っていった。特に、作品分析においてジェンダーと「場所」というふたつの視点を同時に作用させることによって、アメリカ先住民文

化とチカーノ文学が、アメリカ主流文化との葛藤、土着へのこだわり、それに伴う先住民としてのアイデンティティを共有しているという特徴が明らかになった。

チカーナ（ノ）文学において語り継がれるラ・ジョローナやラ・マリンチェなどの神話は、先住民女性たちの物語であり、「場所」に土着するそうした「先住民女性」の表象の伝統が、女性であるチカーナの書き手たちの文学的想像力には極めて大きく影響している。それがどのように1970～80年代までのチカーノ文学全体を刷新する原動力になっているかという研究成果は、本研究期間中に論文として口頭および出版物として発表した。これに加え、チカーナ文学の理解を通して可能となるさまざまな思考枠の転換が、今後のアメリカ文学全体の理解へも影響を与えるだろうという展望を得ることもできた。

以上の点について、本研究で特に注目した具体的な事柄と本研究で得られた見解の概要を以下に記載する。

(1) アメリカ南西部における混淆文化の地政治的意義

米墨戦争（1846-48）の後で締結されたグァダルーペ・イダルゴ条約によってアメリカ南西部が米国領となったことは周知の事実であるが、その際に米墨国境線をリオ・グランデとするまでに両国間に多くの議論があったことはあまり知られていない。これは、領土の面積の問題と共に、「川」という自然物であるがゆえに不安定な境界線を国境とすることに様々な方面から異論があったからである。

しかし、このリオ・グランデという国境線が象徴する国境の物理的不安定性こそが、書き手たちの文学的想像を促す要素として機能する。チカーナ（ノ）の詩人、パット・モーラ、ジミ・サンティアゴ・バカのリオ・グランデや川を描く詩には、米墨国境の両側の土地に根づく先住民としてのチカーナ（ノ）たちにとって、国境というものが物理的にも形而上的にも、いかに無意味であるかが表現されている。同じく、アメリカ南西部のラグナ・プエブロの先住民作家、レスリー・マーモン・シルコウのエッセイや小説、特に『死者の歴書（*Almanac of the Dead*）』(1992) でも、国境の存在をもろともせず故郷の土地との物理的・精神的結びつきを維持し続けていくアメリカとメキシコの先住民たちの連帯と、ビジョンの深さ、そして生命力の強さが重要なモチーフとなっている。

これらの文学作品および本論の理論的基礎となるグローリア・アンサルドゥーアの境域文化論には、こうした不安定性あるいは可変性のある国境において、その流動性を象徴するようなある混淆文化的スペースが発生していることが語られている。これが本研究において「境域」と定義づけられているもので、そこでは、多様な人種、言語、信仰、歴史が葛藤しつつ共存するうちに、既存の文化とは異なる新しい文化が誕生している。具体的には、アメリカ先住民文学に表現される、部族の言語と英語の葛藤や部族の信仰とキリスト教の葛藤、チカーノの文学に見られる、スペイン語と英語の葛藤、そしてヨーロッパ的カトリック教会制度とメキシコ系カトリック教におけるグァダルーペ信仰との葛藤などであるが、これらの境域的葛藤が、新しい文学表現、新しい思想へと導かれていることが重要な特徴となっている。

アメリカのチカーノ研究では、現代アメリカ社会におけるチカーノ移民に対する人種差別や性差別を強調する解読が主流となりがちであるが、本研究では、アメリカ南西部という「場所」に注目するチカーナ（ノ）文学のテクスト解読によって、そうした主流とはやや異なる解釈、すなわちチカーナ（ノ）文学の底流にある「土着（indigenous)」の思想、あるいは先住民性の表現を、より通時的な展望によって再検討する必要性を提案したと言える。

(2) チカーナ文学における先住民女性の表象

米墨国境という「場所」をめぐるチカーナの文学的表現の中には、国境の風景と民族に語り継がれる口承伝承を融合させたものが頻繁に出てくる。その中でも本研究で特に注目したのが、ラ・ジョローナ（またはラ・ヨロナ, La Llorona）とラ・マリンチェ(La Malinche)の伝説である。どちらも、スペインによるアステカ征服を歴史的背景にしているが、こうしたメキシコの先住民女性は、男性中心的な解釈によって、ネガティヴな意味を付与された女性像として表象される傾向にあり、フェミニストの視点からは問題視されるべき表象だった。しかし、近年、こうした先住民女性の表象は、チカーナの表現者や批評家によってオルターナティヴなメタファーへと語り直されている。

例えば、ラ・ジョローナという「泣き女」は、男性中心的かつ国家主義的な言説では、征服者の男に裏切られたことを苦に、自らの子供たちを川に落として溺死させた先住民の母親の幽霊が、失った子供たちの姿を求めて泣きながら川辺に出現し、生きた子供たちを川へと誘引して溺死させるという言い伝えによって、チカーノの共同体では哀れであると同時に恐ろしい存在とみなされてきた。しかし、サンドラ・シスネロスの小説『泣き叫ぶ女の川(*Woman Hollering Creek*)』(1992)、あるいはパット・モーラの詩集『聖なる水(*Agua Santa: Holy Water*)』(1995) は、ラ・

ジョローナの「泣く」行為を、犠牲者や被害者としての自らの境遇を悲観しているからではなく、猛々しく「泣き叫ぶ」ことによって、社会的に不可視だった存在を可視化する行為と解釈し、さらにそうした女性たちが出現する「場所」となる川を、チカーナの力強い歴史の流れを象徴するものとして読み換えている。

また、エルナン・コルテスの愛人であり通訳者として、自らの身を売り、アステカ国家を滅亡へと導いた裏切り者とされる伝説の先住民女性ラ・マリンチェの、「悪女」または「売春婦」としてのネガティヴなイメージも、ラウラ・エスキベルの小説『マリンチェ（*Malinche*）』(2002) では、アステカ国家の男性中心的な性的支配の歴史の中で、極限の状況と主体的に折り合いをつけながら、たくましく生き延びた「生存者」として語り直されている。

こうした語り直しによるチカーナのポジティヴなアイデンティティ構築は、アナ・カスティーヨの小説『神から遥か遠く（*So Far from God*）』(1994) における女性登場人物たちを通しても明らかになるが、カスティーヨはそのエッセイ集『夢見し者たちの大虐殺（*Massacre of the Dreamers*）』(1995) で、ラ・マリンチェに代表されるチカーナの「裏切り」という言説が、男性中心的な世界観にもとづいて構築されたネガティヴなチカーナ像を存続させる装置として機能してきたことを明らかにし、歴史的に刷り込まれてきたチカーナ・アイデンティティのネガティヴなイメージを払拭すべく、チカーナを中心とする視点による、新しいチカーナの歴史観や精神文化のありようを提示している。

以上のように、本研究では、従来ネガティヴなイメージを課されてきたこれらの伝説的先住民女性たちが、チカーナの書き手たちの視点によって、いかにしてポジティヴな生存者、闘争者のイメージへと表現し直されているかを検証した。また、モラガのように演劇でチカーナと先住民女性の伝統を表現した作家がいることもわかったが、演劇という文学のジャンルについては、研究の射程をさらに広げることが要求されるため、アメリカ先住民文学の語りの伝統と合わせて、本研究とは別途の課題で研究する必要があると思われた。

(3)アメリカ文学における境域文化

アンサルドゥーアの境域文化論では、「境域」を地政治的で物理的な国境地帯に生じる文化領域と捉える一方、そのような「境域」は必ずしも物理的でなく、概念上の領域としてもみなすことができるという可能性が示されている。本研究では、チカーナ（ノ）文学における境域文化の概念が、チカーナ（ノ）文学以外の文学を解釈する際にも援用できるかどうか、また、それによってこれまでのアメリカ文学観を刷新する可能性があるかどうかを探ることも試みた。

例えば、カレン・テイ・ヤマシタの小説『オレンジ回帰線（*Tropic of Orange*）』(1997) には、長年ブラジルで生活し、日本でも生活したことのある日系アメリカ人の作者ヤマシタ自身の経験を反映して、従来の日系アメリカ人文学にはあまり例を見なかった異文化混淆のモチーフが存在している。すなわち、ヤマシタは、カリフォルニアのロサンジェルスという、人種的にも言語的にも混沌とした都市という「境域」を想像し、その境域を舞台とする物語を展開することにより、アメリカ文学の中には、アメリカ南西部やアメリカ先住民、またチカーナ（ノ）たちの語る「境域」とは異なる類の「境域」が存在することを示している。

こうした北アメリカとラテンアメリカを横断する「境域」の視点は、ワイ・チー・ディモックなどが近年論じている「惑星（planetary）」の視点と、テクスト分析の方法では一線を画しつつも、世界的規模の地政治的な影響関係の中で構築される新しいアメリカ文学像を提示している点では共通性を有していると言える。また、本研究の余滴として、こうした「境域」の視点が、日本の中でも、沖縄のように、アメリカ南西部と類似した異文化混淆の歴史を現実とする場所の文学を理解するうえでは有効なのではないかという可能性を、崎山多美の小説を論じることによって探ってみた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）


① 喜納育江「淵の他者を聴くことば：崎山多美のクジャ連作小説における記憶と交感」『水声通信』第４巻３号(2008):58-65.（査読無）

② Kina, Ikue. “Endangered or Empowered Species?: Chicana Spirituality for Political Empowerment in *So Far from God*.” *Multi- Ethnic Studies*（『多民族研究』）1 (2007): 98-115. （査読有）

③ 喜納育江「『ラ・マリンチェ』とチカーノ文学：売女についての一考察」『すばる』第 28 巻 11 号 (2006): 326-35. （査読無）

〔学会発表〕(計５ 件)

① Kina, Ikue. “Toward Ecofeminist Praxis for Repossessing Bodies: Performance and Resistance in Cherríe Moraga’s Plays.”(“Native American Literature at Crossroads”in “Back Down to the Crossroads:IntegrativeAmerican Studies in Theory and Practice” (American Studies Association＜米国アメリカ学会＞、2008 年 10 月、於米国ニューメキシコ州アルバカーキーコンベンションセンター)。

② 喜納育江「性的支配と現地女性：ラ・マリンチェと文学的想像力」(一橋大学 COE プログラム「ヨーロッパの革新的研究拠点～衝突と和解」ワークショップ、2007 年 7 月、於一橋大学)。

③ 喜納育江 「カレン・テイ・ヤマシタの *Tropic of Orange* における＜人種＞のボーダレス性」(アメリカ学会第 41 回大会「部会 B：Race Change / Exchange---＜境界性＞の恐怖と憧憬」、2007 年 6 月、於立教大学)。

④ 喜納育江「国境と人種の語り直し：アメリカ南西部の声を中心に」（日本アメリカ文学会第45回全国大会シンポジア「アメリカの語り直し～伝統の解体と流動するロジック」2006年10月、於法政大学）。

⑤ 喜納育江「架け橋としての言語：チカーナ文学におけるLa Malincheの表象」(日本英文学会第78回大会シンポジアム「南の周縁から問うアメリカ」2006年5月、於中京大学名古屋キャンパス)。

〔図書〕(計４件)

① 喜納育江「南から北へ～アメリカ南西部境域と先住民の再移動」(山里勝己編『移動の文学』(仮)、ミネルヴァ書房より近日刊行予定)。

② 喜納育江「再び大地に根ざすために：アメリカ先住民の文学」『やわらかい南の学と思想』 琉球大学編　沖縄タイムス社 2008 年、pp. 192-203.

③ 喜納育江「性的支配と現地女性：ラ・マリンチェと文学的想像力」『性的支配と歴史：植民地主義から民族浄化まで』宮地尚子編　大月書店　2008 年、pp. 145-72.

④ 喜納育江「ラ・ジョローナとリオ・グランデ～米墨国境域におけるチカーナの表象」『木と水と空と～エスニックの地平から』松本昇、他編　金星堂　2007 年。pp. 147-68.

６．研究組織

(1)研究代表者
喜納　育江（KINA IKUE）
琉球大学・法文学部・准教授
研究者番号：20284945

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし